



祝辞

京都大学大学院工学研究科建築学専攻の修士課程を修了し、修士（工学）の学位を授与された皆さん、おめでとうございます。

昨年4月以降、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、大学では、講義や会議はオンラインが当たり前となりましたが、多くの会社でも在宅勤務が実施されたり、出張が減って新幹線や飛行機では利用者が激減したりする状況が今も続いています。しかし、考えてみると、このような社会は、近い将来必ずやってくると考えられていたものでした。コロナは単に世の中の変化を加速させたに過ぎないのかもしれない。

みなさんは、大学で4年間、大学院で2年間、最新の建築に関する設計や理論を学ばれました。これから社会に出て、さまざまな分野で活躍されると思いますが、建築で学んだ知識や考え方は、どのような分野であっても応用が可能です。私も専門は建築音響でしたが、大学院を終了後メーカーの研究所でさまざまなモノから出る音を制御する仕事に携わりました。設計者は、自分たちが開発したモノの音が心地よく聞こえます。一般の人がこの音を騒音だというと、設計者はどうしてよいかわからなくなることもあります。こんなとき、モノを効率や性能などの限られた側面でのみ捉えるのではなく、性能、音、デザイン、使い勝手など俯瞰的に見ながら全体のバランスをとる、といった建築で学んだ考え方が大変役に立ちました。皆さんは、Engineering is not a science.ということばをご存知でしょうか。Ove Arupというイギリス人が、以下のように説明しています。Science studies particular events to find general laws. Engineering design makes use of the laws to solve particular practical problems. In this it is more closely related to art or craft. 私は建築こそが究極の Engineering であると考えています。

これからの日本の社会は、少子高齢化に伴う人口の減少により、建築の分野においても、世界との関係をより意識した活動など、大きな変化が起こると思います。皆さんは、ぜひその変化を先取りできるよう努力してください。

本日は、修了者が集まったの授与式や、祝賀パーティで、みなさんと直接お話ができないことが大変残念です。皆さんの今後のご活躍を心からご祈念をいたしまして、本日の祝辞とさせていただきます。

令和3年3月24日

建築学専攻長 高野 靖

